

## 目 次

■ 卷頭言	6年目を迎えたJMMA／ JMMA会長、常磐大学コミュニティ振興学部長・教授 大堀 哲	2
■ 論考・提言・実践報告		
神奈川県企業博物館連絡会設立と活動について 報告 イギリスのミュージアムとの連携事業 来館者調査について思うこと	／ 神奈川県立歴史博物館 宗像 盛久 ／ 株式会社ココロ 三田 武志 ／ 北海道立北方民族博物館 笹倉 いる美	4 8 12
■ 時の話題	／ 株式会社三菱総合研究所 松永 久 ／ JMMA事務局 森 花枝	13 15
■ 研究部会活動報告	／ ミュージアム文化研究部会 第2・3回研究会「しまの文化とミュージアム」 ／ 大三島町立美術館 浅野執持 平成12年度各研究部会活動計画	18 19
■ 新刊紹介 「ハンズ・オンとこれからの博物館」	／ 株式会社トータルメディア開発研究所 重盛 恭一	22
■ インフォメーション		23

## 巻頭言

# 6年目を迎えたJMMA



第5回JMMA記念大会が去る3月4、5の2日間にわたり学習院大学を会場にして凡そ200名の参加を得て開催された。本年度のJMMAの研究活動テーマ「21世紀のミュージアムマネジメント～ミュージアムとリレーションシップ」に基づき、ミュージアムと地域（住民）との関係、企業との関係、学校との関係、利用者との関係などを改めて問い合わせとの趣旨のもとに様々なプログラムが展開された。

主たるプログラムの内容は、●21世紀に向けてのミュージアムへの期待や提案などをいただくシンポジウム「21世紀のミュージアムへの期待」、●21世紀のミュージアムに期待されるミュージアムマネジメントについて、「ミュージアムと地域とのリレーションシップ」、「21世紀の博物館を展望する」といった4つの側面から実践的、創造的な提案をいただきながら参加者が一緒に創り上げる「フォーラム」、●会員の研究発表（「観光地の活性化とミュージアムネットワークの挑戦」、「学社融合と博物館のアウトリーチ活動～博物館の出前授業～」、「エコミュージアムの未来とその可能性」、「施設計画のためのミュージアム評価手法の提案」、「エージェンシー化の先導的試行～（財）ふくしま海洋学習館」、「スミソニアンのメンバーシップにみるリレーションシップ・マーケティング」、それに●アフタヌーンミュージアム「まちまるごとミュージアム」であった。

いずれも、これまで会員が地道に研究や実践を積み重ねてきた経験やアイディアを持ち寄り、交換しあい、21世紀に向けて新しいミュージアム、新しいミュージアムマネジメントの道を探り、創造していくとする意欲が強く感じられる内容であった。この中でフォーラムのレベルの高さとともに、会員の研究発表にみられる実践の確かさはきわめて印象的であった。そして今回初めての試みであるアフタヌーンミュージアムは、Aコース（動く東京下町ミュージアム 都電荒川線）、Bコース（谷中・坂のミュージアム）共に担当者が何度も事前研修を重ね、資料の準備にも十分配慮するという熱意に支えられて非常に充実したものになった。

今大会で忘れられないのが第1回の学会賞であろう。この学会賞は、JMMA研究紀要、会報、年報、研究部会、大会

JMMA会長 大堀 哲  
(常磐大学コミュニティ振興学部長・教授)

等における発表の内容を中心に選考するものであるが、学会活動への貢献度なども参考にするのはいうまでもない。このたび会長賞に輝いた3名の会員は、いずれもミュージアムマネジメントの実践活動とそのまとめの評価が高いことに加えて、日常の学会活動にきわめて熱心である点も見逃せない。

井上重義日本玩具博物館長（兵庫県香寺町）は個人立の博物館を長年にわたり運営し、今日では博物館相当施設としてミュージアムマネジメントの実際を身にもって体現してきた業績と、伝統手芸の“ちりめん細工”を現代に復活、普及させた経緯を「年報」（平成10年度）に発表し、人材育成と地場産業の復興、博物館の経営基盤の強化等につとめた一連の活動が高く評価されたものである。当博物館のコレクションの収集、保存をはじめ、全体のマネジメントのあり方については、関係者に大きな刺激と勇気を与えていている。



授賞式での井上重義氏

長島雄一福島県立博物館主任学芸員（福島県会津若松市）は、博物館の館外活動の理想的なあり方の一つを学校教育との連携で実現させた実践について「年報」（平成10年度）で報告した。これは「学芸員による出前授業（アウトリーチプログラム～福島県立博物館の場合～）を、自らの創意工夫と勇気を持って取り組み、我が国の博物館活動に新しい分野を開拓した実績が高く評価されたものである。学校の校長、教師に指導者としての有り様を指し示した点も賞賛された。



授賞式での奥野花代子氏



授賞式での長島雄一氏

奥野花代子神奈川県立生命の星・地球博物館専門学芸員（神奈川県小田原市）は、博物館をはじめ学校教育現場、一般市民等とのネットワークのもとで実効性の高い教育普及事業を継続的に運営、発展させてきた実践が高く評価された。これは月に一度開催の教育普及事業を制度的にも縛られない恣意的でゆるやかな任意の組織体制のもとで地域に広げ、しかも形骸化させずに持続させてきた経緯を平成11年度研究紀要に報告したもので、その成果は今後の我が国の博物館活動に大きな参考資料を提供する点で意義が大きい。

今回受賞には至らなかったものの、3氏に匹敵する実践研究の成果を上げている会員は少なくないと考えられる。積極的に会報や研究紀要等に投稿し、他の会員に貴重な参考資料を提供していただくとともに、研究会や支部活動等にも積極的に参加され、学会賞を目指していただきたいと考えている。

さて平成12年度も早くも2ヶ月経過したが、関西ミュージアムメッセの一環としてJMMA等が主催した「国際シンポジウム・新ミュージアムの時代」の準備に追われる日が続いた。しかしシンポジストの沖吉理事、橋爪会員、コーディネーターの塚原幹事ほか登壇者による内容の濃いディスカッションが展開され、200名を越す参加者に大きな共感を与え、成功を収めることができたのは幸いであった。もちろん運営その他の面でいくつかの反省すべき課題はあるが、それらは次に生かさなければならぬと考えている。このシンポジウムの諸準備、期間中の運営万般にわたり大変なご苦労をおかけした事務局、近畿支部の皆様には心から感謝の意を表したい。

6年目を迎えたJMMA、本年度も11年度に引き続き研究活動のテーマは「21世紀のミュージアムマネジメント～ミュージアムとリレーションシップ」である。このテーマに沿って各研究部会の活動を中心に、さらにミュージアムと地域、利用者等との関係性にかかる実践研究を深めていただければ幸いである。これらJMMAの研究成果が社会に一層明確に反映できるシステムを構築していくのも今年度の課題としている。

なお、今年度北海道、東北、近畿などの支部が活動をスタートさせることになっているが、少しづつ仲間を増やしながら研究部会との連携をはかる活動など、決して無理することなくできるところから進めていただければと思う。長い目で見れば支部活動が学会全体の足腰の強化につながると確信し、前進したい。

会員皆様のJMMAへの変わらないご協力・ご支援をお願いするとともに、一層のご活躍をお祈りする次第である。

# 神奈川県企業博物館

## 連絡会設立と活動について

神奈川県立歴史博物館

宗像 盛久

### ◆はじめに

神奈川県企業博物館連絡会（以下県企連）は、筆者が以前から県内の企業博物館に興味・関心をもち、その存在意義を一般に知らしめ、また博物館相互のネットワークを結びたいことから、昭和60年に発足した。当初、毎月一回の定例会を開くため会員に告知し、持ち回りで各館の展示・運営・広報などについて勉強会方式で行った。

以下、これまでの活動について紹介したい。

### ◆会員の認識と加入

昭和60年に筆者が神奈川県教育委員会より依頼を受け神奈川県博物館協会、神奈川県教育委員会主催による博物館等職員研修会「生涯教育における博物館のあり方」が川崎の電車とバスの博物館で行われた。この研修会で、県内における企業博物館担当者参加の呼びかけをし、初めて公・私立博物館、社会教育担当者との融合が図れた。その後、これを機会に会員の勧誘と話題の提供・相互の連携のために設定したが、驚いたことに、また、当然とは思われたが、異業種間の相互に殆ど皆無に近い施設の存在・内容が知られていなかった。

しかし、回を重ねるごとに参加者の感動・親しみが伝わり、認識が向上していくなかで新たな活動について議論も交わされるようになった。

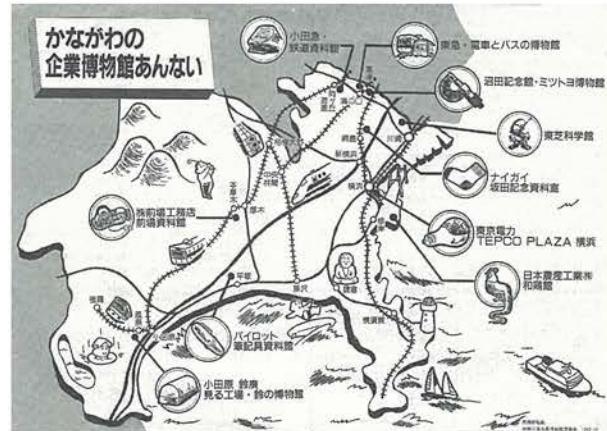
### ◆活動の形態1 企業博物館あんないマップの作成

定例会が起動にのり、会員数も10施設になった平成4年には、会員の連携と施設の紹介を知らせるために「かながわの企業博物館あんない」のマップを企画・立案し、作成した。同時に、筆者が新聞発表をしたこともあるてか、県内の小学校・団体などからの反響が多くかった。

これを機会に、未加入施設の勧誘・定例会の内容の一層の充実を図った。



平成4年10月29日 神奈川新聞



企業博物館マップ「かながわの企業博物館あんない」

### ◆活動の形態2 展覧会による県内企業博物館紹介

県企連の活動及び存在が少しづつ知られるようになり、また、新聞・雑誌等においても企業博物館の動向が話題になってきたころ、地元横浜銀行内の（財）はまぎん産業文化振興財団において展示会の要請があった。これは、第20回企画展はまぎんカルチャーパーク展示「かながわの企業博物館」あんない（パート1）という内容で、平成5年5月9日（金）～29日（土）まで開催された。この時は、マップには加盟していなかったキリンビアビレッジ（キリンミュージアムドーム）も入り、11施設の紹介となった。初めてのことでもあり、会員が戸惑いを見せながらの作業を行ったが、展示構成は、写真パネルと施設紹介パンフレットの提供のほか、パイロット筆記具資料館（平塚）では、手づくり万年筆の道具も特別出品され、また体験も会期中に行われ、内容が一段と豊かなものになった。



第20回企画展はまぎんカルチャーパーク展示のチラシ



手づくり万年筆道具

#### ◆活動の形態3 各新聞・雑誌からの取材及び自治体発行誌面への企業博物館の紹介要請

平成5年から新聞・雑誌からの取材もあり、紙面に紹介された。その内容については、以下の通りである。

平成5年1月 週刊ダイヤモンド  
トレンド増える企業博物館を国がパックアップ  
一財政基盤の弱さが問題にー

「一地域レベルではすでに、企業博物館同士の交流・協力体制ができているところもある。例えば、神奈川県内では、県立博物館の主任学芸員のバックアップで神奈川県内企業博物館連絡会が10年ほど前に設立された。

連絡会に加盟しているのは、同県内にある企業博物館の半数強にあたる10館。連絡会では、92年秋、初の試みとして10館の所在地・展示案内・足の便・周辺観光ガイドなどを盛り込んだマップ「かながわの企業博物館あんない」を4万部作成し、各館の窓口で無料配布し始めた。ー」

平成5年2月21日 神奈川新聞  
「企業博物館」の現状と展望

「採算を度外視」に暗雲  
支援体制の整備が急務

「一県内では、県企業博物館が構成され、持ち回り勉強会の成果として、昨年秋、加盟館の案内マップが完成了。一県内の企業博物館10館で構成する連絡会は、昨年秋加盟館の案内マップを作成した。5年余にわたる担当者の勉強会の成果で、来館者へのサービスとともに企業博物館の存在意義を社内外にアピールする狙いもある。ー」

さらに、神奈川県県民部の広報誌「月刊かながわ」では、初めて企業博物館についての筆者による紹介記事を連

載した。

1. 平成5年5月  
かながわの企業博物館  
企業のオルタナティブカルチャー
2. 平成5年6月  
(株)ミツトヨ ミツトヨ博物館  
マクロからミクロまでの測定値を求めて
3. 平成5年7月  
キリン横浜ビアビレッジ ミュージアム・ドーム  
ビールの起源はいつから?
4. 平成5年8月  
東京電力TEPCO PLAZA横浜  
エネルギーの電気と楽しい電気
5. 平成5年9月  
(株)前場工務店 前場資料館  
ノコギリ・カンナ・ノミなど家づくりの道具を  
継承して
6. 平成5年10月  
東芝 東芝科学館  
からくり儀右衛門の技術からハイテクの紹介へ
7. 平成5年11月  
東急 電車とバスの博物館  
身近な乗り物をシミュレーションで体験
8. 平成5年12月  
日本農産工業 和鶏館  
在来種から天然記念物までの鶏を求めて
9. 平成6年1月  
鈴廣 蒲鉾工業 鈴の博物館  
蒲鉾のできるまでと世界各地の鈴を紹介
10. 平成6年2月  
小田急 鉄道資料館  
開通時の駅舎を今に活かして
11. 平成6年3月  
ナイガイ 坂田記念資料室  
実用からよりファッショナブルに
12. 平成6年4月  
パイロット パイロット筆記具資料館  
羽根ペンから粋をこらした工芸品まで

また、平成6年3月には、神奈川県商工指導センター発行のデザインKANAGAWA NO.31において、筆者が、「地域文化と企業博物館」のテーマで現状と活動について紹介を行った。特に県内企業博物館と産業遺産保存の現状の項目で、各施設の資料の収集と保存及び活動と社会貢献のために、整備・拡充する必要性について記した。

#### ◆活動の記録としてのあゆみの作成

県企連では、約10年にわたる活動状況の記録をまとめるため、編集委員会を組織し、数回の会議を経て、平成10年5月1日に発行した。

また、記念すべき当時の会長前場幸治氏の刊頭文「企業博物館によせられる期待」には、「一企業博物館の最大の目的とも言うべき、企業の理解と市民の社会教育をより現実のものとする為に、この連絡会に賛同した各館の代表者によって月例会を開き、運営の状況やPRのあり方、それぞれの苦労や良かった事等を報告し、話し合つてきました。県内の企業博物館も増加の一途を辿り、連絡会への参加館も増え、平成5年10月28日には、現在の神奈川県企業博物館連絡会として発展をとげ、博物館相互の連絡と提携、博物館事業に関する調査研究、機関誌の発行や共同事業の企画等を目的に現在まで活動を続けてきました。一」と記述され、今後の各館とのより密接な連携と各事業の展開、及び未加入館の加盟促進が感じられる。

#### ◆活動の形態4 マップ第2判の作成

平成4年時に作成したマップに続き、平成7年に新たに加盟館を含めた紹介と内容についてのマップを発行した。このマップで新たに加盟した館には、「横浜さとうのふるさと館」、「キリン横浜ビアビレッジ」、「日本郵船歴史資料館」、「三菱みなどみらい技術館」、「日清製油ウエルネスギャラリー」、「電信電話ことはじめヨコハマ館（後に閉館）」

（以上横浜）、「SHISEIDOかまくら工房」（鎌倉）、名称変更「鈴廣かまぼこ博物館（小田原鈴廣 見る工場 鈴の博物館）」で新たに7館が加盟している。前回とは判型も変わり、交通の便や見やすさなどに注意をはらった。

## かながわの 企業博物館あんない



神奈川県企業博物館連絡会

## 企業博物館マップ

「かながわの企業博物館あんない」第2判

#### ◆活動の形態5 2度目の展覧会

平成5年に実施した県企連紹介の展覧会に続き、平成11年10月15日（金）～26日（火）（17日、24日を除く10日間）の日程で、前回と同じ会場のはまぎんカルチャーパークで開催した。今回は、『かながわの「企業博物館」あんない特別展』の名称で新たな施設や準備中の企業も加わり、23館を紹介した。

前回とは内容も一新し、参加・体験（ソーラーカーブくり、わたあめづくりなど）のメニュー各社の提供による景品のプレゼントがあつて会場が一段と賑わいを見せていた。この実施の背景については、筆者が平成9年に大阪で開催されたミュージアム・メッセ'97に参加し、その内容について紹介し、館員各位に図り、実施したものである。



県企連月例会（平成11年10月15日）

## かながわの 「企業博物館」あんない

平成11年10月15日（金）～平成11年10月26日（火）  
但し17日（日）及び24日（日）休館



開館時間 午前10時～午後6時

● 場 所 横浜駅西口ビル横幅はまぎんカルチャーパーク（YBS南幸ビル1階）

● 入 館 料 無料（先着100名程度に粗品進呈）

● 主 催 神奈川県企業博物館連絡会

● 協 力 （財）はまぎん産業文化振興財団

※ 体験教室 ①わたあめ作り 10月16日（土）、23日（土）の両日13:30～、13:30～、15:30～

②手作り工作 10月16日（土）14:30～15:30、16:30～17:30

③丸棒で測定 10月23日（土）10:30～11:30、12:30～13:30

④ソーラーカー作り 10月23日（土）14:30～15:30、16:30～17:30

参加希望者は開館にて名前（又は姓）・姓、氏名、住所、部屋番号、電話番号、年齢、男女別、職業（学生の場合学校名）を記してお申し込み下さい。希望多数の場合、各回先着10名の方に参加していただきます。その方には参加証をお送りします。

● 問合せ先及び体験教室の申込み 〒213-0012 川崎市高津区坂戸1-20-1 TEL044-813-8201

（株）ミツヨシ沿田記念館賞付 かながわの企業博物館 係

2度目の展覧会のチラシ



平成9年11月14日 神奈川新聞



平成11年10月4日 神奈川新聞

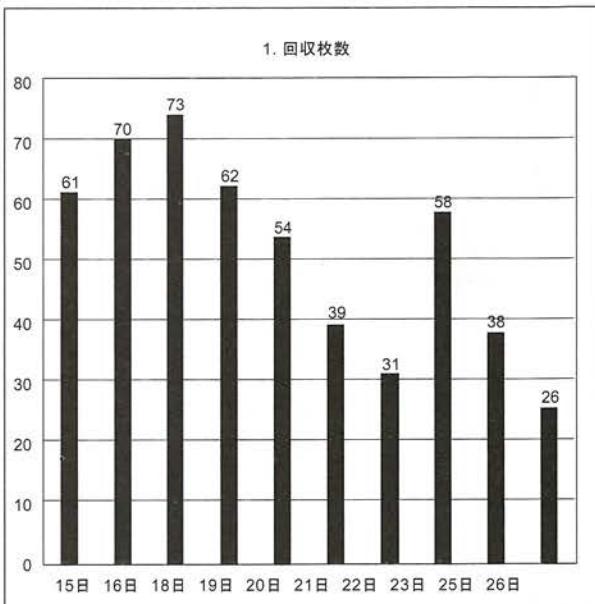
## 県企連特別企画展 来館者アンケート集計

### 調査の概要

- 調査の目的：来場したお客様の県企連特別企画展に対する意見・希望・感想等を伺い、今後の活動の参考にするため実施した。
- 調査の方法：来場者にアンケートを配布し見学後回収した。アンケートの協力を高めるため回収時に各館提供の粗品を記念品として差し上げた。

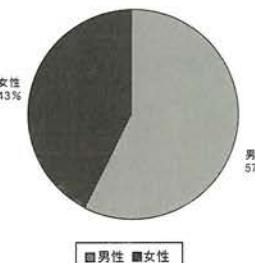
### 3. 回収枚数：

月日・曜日	来場者数	回収枚数	回収率
10月15日(金)	76人	61枚	80%
10月16日(土)	91人	70枚	77%
10月18日(月)	95人	73枚	77%
10月19日(火)	89人	62枚	70%
10月20日(水)	64人	54枚	84%
10月21日(木)	50人	39枚	78%
10月22日(金)	63人	31枚	49%
10月23日(土)	82人	58枚	71%
10月25日(月)	51人	38枚	75%
10月26日(火)	50人	26枚	52%
合計	711人	512枚	
1日平均	71.1人	51.2枚	72%

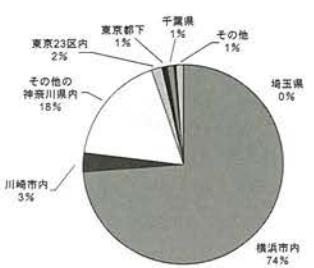


来場日	15日	16日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	25日	26日
曜日	金	土	日	火	水	木	金	土	月	火
枚数	61	70	73	62	54	39	31	58	38	26
%	12	14	14	12	11	8	6	11	7	5

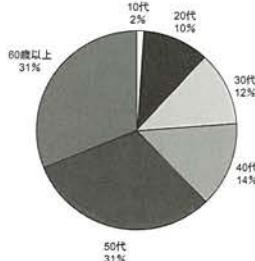
### 2. 性別



### 3. 住まい

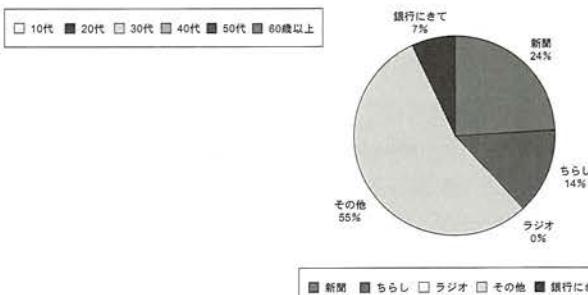


### 4. 年齢層

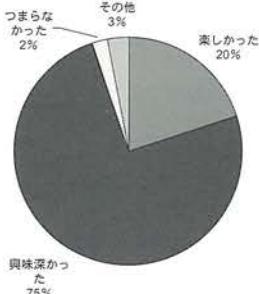


□ 10代 ■ 20代 □ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60歳以上

### 5. 認知経路

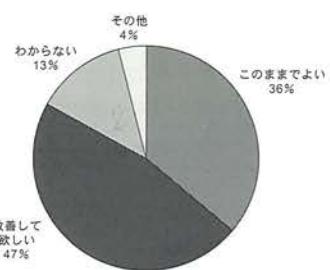


## 6. 感想



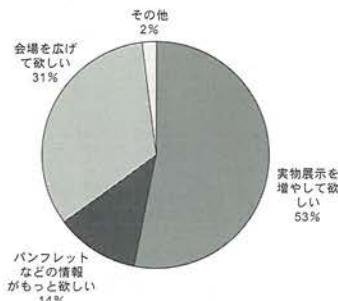
■ 楽しかった ■ 興味深かった  
□ つまらなかつた □ その他

## 7. 今後当企画展に望むこと



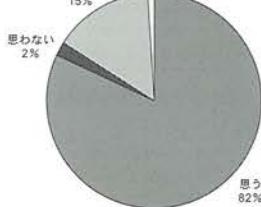
■ このままよい ■ 改善して欲しい ■ わからない □ その他

## 8. 前問で改善して欲しいと答えた方、どの点を改善したらいよだと思いますか？（複数回答有り）



■ 実物展示を増やして欲しい  
■ パンフレットなどの情報がもっと欲しい  
■ 会場を広げて欲しい  
□ その他

## 9. 今後も当企画展に来場したいと思いますか？



■ 思う ■ 思わない  
■ わからない □ その他

## ◆今後の活動予定

以前からの展示会開催のほか、加盟各館へのコース別ツアーや見学、加盟各館のガイドブック（小・中学生用、一般用）などが、現在筆者が考えているところである。これらは、いずれも早期に会員とも協議し、実施に向けて行動していきたいと思っている。

## 報告

## イギリスのミュージアムとの連携事業

株式会社ココロ

三田 武志

本稿は、展示用アニマトロニクス（以下、動刻）の制作会社である弊社ココロの、海外の博物館での移動展示事業についての概要である。その実例として、欧州市場におけるこれまでの展開実績と、1998年から大英自然史博物館で展示が開始されたココロと大英自然史博物館の共同事業である移動型展示「神話とモンスター展」の2件を紹介する。

## 1. 欧州における事業展開

## 米国から欧州へ

1985年以来、弊社は自社の恐竜を中心とする動刻を米国市場において、主に博物館における特別展示として事業展開を開始した。米国市場での成功をうけ、1990年には欧州で最初の特別展示となる恐竜展を、大英自然史博物館にて開催した。動刻を使用した恐竜展示は、従来の化石やパネルを中心とする展示と比較し大きく異なるものであった。それは、恐竜についての興味をもたせるという教育的効果が大きい点、集客性の高さから博物館の運営という経済的な効果にも大きく寄与する点、などである。大英自然史博物館は、米国市場での動刻恐竜展の評判をいち早く聞きつけ、その開催についての可能性をココロに打診してきた。

大英自然史博物館は19世紀以来の100年以上の伝統と、6700万点という世界有数の展示所蔵品を有する博物館として有名である。一方で1990年という年は、大英自然史博物館の長い歴史の中でも、その組織が全面的に変革された画期的な年でもあった。それまでは、植物学・昆虫学・鉱物学・古生物学・動物学の5つからなる科学部門を中心に構成されていた。それを、展示教育部・営業開発部などの部署を設置・拡充し、科学部門と同等のものとした。つまり博物館は公共教育の重要な場である、という観点から、より教育を重視するものへと大きく転換した。それに伴い、博物館の展示も従来の研究成果を公表する専門性の高い展示から、教育的に活用できる教材として的一般性を重視する展示へ見直されることとなつた。この転換期にあたり、常設展示だけではなく、年数回開催される特別展示についても、新たな手法が求められていた。動刻を使用した展示は、そのような新しい要求に対し、まさに期待通りなものとして受け入れられた。動刻恐竜展は、当初は大英自然史博物館においての1回だけの単独開催として開始された。しかしそれまでの特別展示にはない、話題性・集客性などから、これを博物館の事業として欧州地域で展開するものへと発展していくことになった。

## 事業化へのプロセス

欧州での事業化にあたり、博物館として必要なものとしては次のようなものがあった。

- ◆ココロとの代理契約締結などの組織的な協力体制の整備。
- ◆自館もしくは自国での展開のみを視野にいれていた従来の営業体制を、他館や他国の顧客へと拡大する営業力の強化。
- ◆営業にともなうマーケティングや営業ツールの整備。
- ◆動刻の設置・撤去およびメンテナンスなどの技術者の確保と養成。

上記のものは事業の立ち上げにあたり初期的に必要最低限な事項である。これらのために、ココロとしては金銭的な投資のみならず、人材の投入を含めて多角的に行つた。さらに、恒常的に事業を展開するために、新たな市場の確保、新規動刻の定期的な投入など、現在に至るまであらゆる協力を継続的に行ってている。ココロと大英自然史博物館とは、毎年1回年次会議（東京とロンドンで交互に主催）を開催している。その場で、問題点の解決はもちろん、より積極的に事業を展開する方法を常に討議している。

もちろんこの事業はココロの投資のみで行われてきたわけではなく、博物館としても事業予算の確保、人材の確保など積極的に行われてきたことは言うまでもない。しかし伝統ある博物館であり、当初は館の機構改革やココロの動刻を用いた事業展開の、すべてが受け入れられたわけではなかった。しかし時間が経過するにあたり、博物館内においてもその存在が認知されるになった。今では移動展示は博物館の重要なポジションの一つとなっている。

## 博物館にとってのメリット

現時点における博物館としての本事業の意義については下記のようにまとめられている。

- ◆展示・教育的側面から博物館を内外により広くPRする機会
- ◆欧州内のみならず世界に対し、新しい試みをする博物館の姿を提示する機会
- ◆他の機関との交流をはかる機会
- ◆館外の新しい情報をより早く入手する機会
- ◆収益面で博物館に寄与する事業

大英自然史博物館以外で開催された、動刻を使用した展示の最初は翌年1991年である。その後現在にいたるまで、29カ国で88回の展示会を開催している。市場としては欧州の他に、中近東・アフリカなどがあり、会場としては博物館はもちろん、科学館・一般展示ホール・植物園・動物園など多岐にわたる。そしてそのすべての開催での集客数は1200万人に及んでいる。今年の4月現在、ココロから大英自然史博物館に提供している動刻は恐竜が70体、巨大昆虫が20体、その他が10体の計100体となっている。

## 博物館組織と移動展示

博物館の組織と本事業の関係について一言しておく。博物館はボード・オブ・トラスティーズ(Board of Trustees)という公式な運営委員会のもとに、館内組織が組まれている。現在、ココロとの事業を中心に行う部署は移動展示課 (Touring Exhibitions) である。この部署は営業開発部 (Department of Development and Marketing) に属している。この部は博物館全体の営業業務と寄付金収集などを主な業務としている。現在でこそ移動展示課という部署名になっているが、当初はココロ・エキシビション (Kokoro Exhibitions) という名称であった。名称変更は1997年になされており、「ココロという会社のものを扱う」という意味の部署名から、「博物館の展示を館外で行う（移動展示）」課へと変更された。これは、この部署が館内において認知され、博物館としてより重要な機能を果たすことを期待されてのことである。大英自然史博物館内の特別展示もしくは常設展示を行うのは展示教育部 (Department of Exhibitions and Education) である。1990年において最初に動刻を用いた特別展示を行った際も、展示構成は展示教育部が行った。動刻の設置・撤去・メンテナンスに欠かせない技術者はこの展示教育部に属している。現在では数人の技術者を移動展示課でも抱えているが、多くはこの部に属している技術者である。さらに、館外の展示を構成するにあたり、専門知識やアドバイスが必要な場合は、科学部門に属する各専門部署（例えば、恐竜の場合は古生物学部、昆虫の場合昆蟲学部）に協力を得ることになっている。

恐竜の場合を例に取ると、ココロからはこれまで5セット（1セット平均12体程度の動刻）を欧州市場に投している。各セットの構成は、基本的に制作者であるココロの意向が中心となって決められることになっている。しかし同一セットを長年にわたり同一市場で展開するのは難しい。そこで、数年に一度、セット内容の再編成が必要となる。現在運営しているセットは大型セットが2セットと小型セットが2セットとなっている。現在の大型セットは、「肉食恐竜展」と「恐竜、卵とベビー展」である。これらを構成するにあたっては、古生物学部に所属し恐竜研究の第一人者であるDr. Angela Milnerの協力を得て行った。その際に、必要であれば動刻恐竜の外観・演出なども変更し、その監修もMilner博士の協力を得た。

## 「神話とモンスター展」

### 新しい移動展示構築へ

さて、これまで紹介してきた移動展示は、ココロ動刻を中心構成し、それに博物館として必要なアイテムを付加するものであった。これに対し、事業を開始してから5年を経過した時期に、大英自然史博物館から、両者の関係をさらに発展させる新しいスタイルの移動展示を

開発しないか、という申し出がココロに対してなされた。それは、館の展示構成機能や教育機能を盛り込み、博物館が所蔵する貴重な標本類と、博物館が誇る研究者の研究実績をベースに、上述の展示教育部が、ココロの動刻を含めて展示構成をするというものである。そしてこれを営業開発部の移動展示課が営業活動を行い展開する。これはある意味でのジョイントベンチャー事業としての発想に基づくものである。

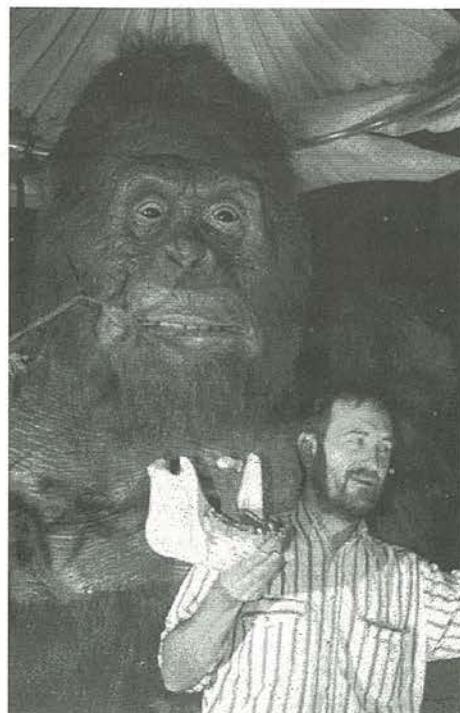
その最初の実例となったのが、「神話とモンスター展」である。この「神話とモンスター展」の基本構想が示されたのは1996年秋のことであった。当時、博物館としては、1995年から1999年までの5ヶ年計画の中で、すでにその構想は温めてきてあった。1999年が1000年代最後の年となり、その年の特別展示は英国の自然科学の歩みをふりかえるもの（「発見の航海展」1999年7月から大英自然史博物館で展示）が決定されていた。その前年の1998年の特別展示に、ロボットを多用した新しい移動展示である本展の開催が策定された。基本構想が示された後、1997年2月に東京で開催された年次会議の中で、具体的な両者の投資金額とその回収計画が博物館側から示された。ココロが動刻を制作して投資する額は、これまでの投資に比べてもかなり大規模なものであり、回収計画に対する実現性などの討議が活発になされた。結果、1998年春からの展示を行うことで両者が合意することになった。この際、金銭面の交渉は主に営業開発部長を中心に、合意後は展示教育部門の担当者と、具体的な動刻仕様・演出や、他の展示物との関係などを話し合うことになった。1997年夏にロンドンにおいて最終的な仕様・演出が確認され、その年の秋からココロは制作に着手することになった。制作動刻は計6体（中で1体は動きなし）で、すべて新設計。1998年初めには動刻が完成し、英國サザンプトンの港に向けて出荷された。英國到着後、直ちに博物館に陸送。ココロと博物館両者の技術者の手で、会場である館内の38番ギャラリーに設置された。他の展示物も続々と搬入され、すべてが整ったのは一般公開の3日前であった。一般公開の前日、プレス発表が行われ、その翌日の主要新聞にはカラーで展示内容（特にココロの動刻）が掲載された。またBBCをはじめとする多くの放送メディアでも、今までにまったくない新しい展示の模様が放映された。

その後、本展は欧州内の博物館を中心に展開されており、それぞれの開催地域にある神話や架空の生物の展示が追加されている。展示会は非常に好評で、マスコミにも多く取り上げられている。現在第1セットが欧州内を移動展示されているが、2001年春からは第2セットが、ドイツ国内で7ヶ所を3年間にわたり展開することが決定されている。現在ココロではその第2セットの動刻を制作中である。

## 神話の世界をロボットで

この展示は、架空（神話上）の生物と人類の想像力の関係を科学的に取り扱うというものである。大英自然史

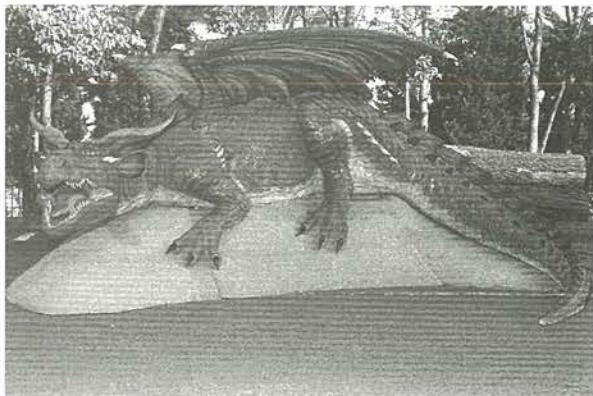
博物館には、「サイクロプス（神話上の一つ目の巨人）の頭蓋骨」「ドラゴンの牙の化石」「イエティの頭髪が着いた頭皮の標本」など、架空の生物に関する標本がいくつか存在する。これらの標本の多くはビクトリア朝時代に、標本取扱業者から博物館が購入したものである。もちろん実際の標本ではなく、たとえば「サイクロプスの頭蓋骨」は、マストドンと呼ばれる哺乳類の頭蓋骨であり、「ドラゴンの牙の化石」は恐竜の歯の化石、「イエティの頭皮」はヤクの毛皮であることが、その後の研究で明らかになっている。しかし、これらの標本が博物館にもたらされたビクトリア朝時代は、科学実証主義の黎明期であり、それまで神話のこととされていた多くのものを科学的に実証しようという動きがあった。これらの事実を踏まえ、神話などに登場する架空の生物と、人類の創造力には何か相関関係があるのではないか、というテーマが設定された。



「イエティの動刻」

この展示は自然史博物館という場所ではかなり挑戦的な試みである。博物館の中には、「過去の誤った事実を内外に知らせるだけで意味がない」とか、「テレビドキュメンタリーなら良いが、博物館の展示としてはふさわしくない」などの批判があった。しかし、「これまでになかった博物館の取り組み」を示し、さらに、「過去の事例を興味本位ではなく正面から取り扱う科学展示である」ということから実現にいたった。この展示をより魅力あるものにするため、架空の生物を2次元の絵画や映像ではなく、3次元のロボットで表現をし、展示をより幅広いものにする必要があった。そこでココロの動刻を利用する事が不可欠な要素となつたのである。

## 2. 今後の展開



「ドラゴンの動刻」

### さまざまな特別展示

大英自然史博物館には、現在特別展示場が2ヶ所ある。それぞれの場所の広さは500m<sup>2</sup>である。そこで年に各2回、計4回程度の特別展示を開催している。現在は2ヶ所ある特別展示場であるが、2つめができたのは昨年のことであり、それまではギャラリー38番が1ヶ所だけであった。博物館が所蔵する膨大な所蔵品・研究成果の公開、数多くの学校動員やリピーター確保のための教育的 requirementにこたえるための展示など、博物館で開催する展示内容は多岐にわたる。

そこで、年に4回開催される展示も、そのターゲットを大別して成人用と家族用に分けている。成人用の展示は博物館のメンバーシップを主な対象にするもので、博物館や自然史に興味をもつ一般成人向けのものである。必然的に専門的な内容が多くなる。これに対して家族用の展示は、大人から子供まで楽しめる展示である。年間を通じての来観者数に大きな影響を与えるのは、この家族用展示の人気と評判である。博物館には年間多くの学校動員がある。各学校が、英国内に多数ある博物館の中で、その年に、どこを学校見学の対象とするかは、それぞれの博物館がおこなっている特別展示の内容に左右されることが多い。学校見学で面白かった展示は、その後、生徒が家族を伴って再度来館する可能性へつながっていく。さらに家族用展示の中でも、ココロの動刻などを使用したものはブロックバスター展示として位置づけられ、投資がかかる難点はあるが、集客性・話題性に優れている利点も大きい。これまで、大型恐竜展が2回、大型昆虫展（昆虫動刻を使用したもの）が1回開催され、他の特別展示に比べ、圧倒的な集客数を誇っている。博物館としても、数年に一度開催されるココロ動刻を使用した展示は、運営的にも欠かせないものとなっている。過去における数度の成功を踏まえ、展示内容を博物館が構成し、それに合わせてココロがオリジナルの動刻を制作する新しい方法を導入した。両者にとっての新しい試みの第一歩はここにしるされた。

ココロの動刻を使用した特別展示としては、2001年夏に大英自然史博物館をスタートに展示される新しい展示会が既に決定している。この展示についても今年（2000年）夏までに基本構想が決定し、年内には動刻の仕様・演出が決定され、来年早々から制作が始まる予定である。

いっぽう、ココロの動刻は大英自然史博物館の常設展示にも使用されている。最新の制御を駆使した新作動刻が来年4月から展示されることが今年3月に決定された。また、現在、ココロが大英自然史博物館の展示を日本に導入するという、新しい事業展開への試みが始まっている。さらに、本事業で築き上げられた大きなネットワークの中から、欧州の他の博物館で構築された展示を日本で展開してほしい、との要望がココロに対し直接・間接に数多くもたらされている。これらも随時日本およびアジア市場で紹介、実現していくつもりである。またこれらの新しい展開については、別の機会に紹介をしたいと思う。

## 来館者調査について思うこと

北海道立北方民族博物館

笹倉 いる美

博物館で様々な調査が数多くされていることは、私が勤務する博物館に依頼されてくるアンケートや、各館の年報に掲載される報告、研究者の論文などからもわかります。博物館での調査の必要性をとく文章も多く目にするようになりました。こうした調査の中には、私には正直なところ一体何を目的としているのか不明なものもあります。それでも何かしらには役にたつんだろうかと思う一方で、アンケート調査の結果をみるたびに、それが現場でどういきるのか、全体の傾向を知ると自館を知ることは全く違うと、必要な情報は自分たちで得なければならぬという当然のことだと思います。博物館での調査についてはその程度の興味をもっているにすぎませんでした。

しかし最近こうした調査の中にも気になることがでてきました。それが例えば本誌15号にも掲載されている、北海道大学の佐々木亨さんが北海道開拓記念館で行った来館者調査でした。私は前述しましたように、さして来館者調査について詳しく勉強をしてきたわけでもありませんが、佐々木さんからこの調査についてお話をきいたとき、それは違うのではないか、と思いました。具体的にいって「会話採取調査方法」についてです。

15号に掲載されたものの中では詳しく説明されてはいないのですが、佐々木さんが行った会話採取調査方法というものは「被調査者に対して、事前に何の説明も行わず、許可もえず、調査者（佐々木さんと北海道開拓記念館職員）が常設展示室で来館者の会話を耳をすまし、メモをとる」というものです。私はこれは調査というようなものではなく、単なる盗み聞きではないかと思い佐々木さんにもそう話しましたが、「海外では行われている」ということと「自分はされてもかまわない」という2点から問題はないということでした。

海外で行われている、というのがそのまま理由になるはずもないことは、ここに述べる必要もないと思います。

私は博物館において調査の名のもと、来館者の会話をこっそりきいてメモしたり録音したりするということ是非常に問題があると考えています。特に理由をつけずとも、自分が来館者の立場では、されたらとてもいやなことですし、博物館職員の立場からいいますと、そうした調査が自館ではなくても、行われているといったことが一般に知られたとき、博物館全般に対しての信頼感とかそうしたもののが失われるのではないかととても心配になります。この場に書いて、そうした調査が行われていることをあえて知らせるようになることについてもためらいがありました。

会話採取調査方法への反論を用意するようなことなのかも思ったのですが、そう思うのは自分だけかもしれないと言われたため、30名以上の方に、博物館で自分の会話が無断で聞かれ記録されるということについてどう思うかをお聞きしました。2名が全く問題なしということでしたが、他は絶対いや、またとえ事前に説明があったとしても感じが悪いという意見が多くきかれました。なお、この

データは均質なものではありませんが、だからといって否定されるものでもないと考えここにあげました。数値化したものに依らなければ物事を判断できないというのは非常におかしなことと思っていますし、本来は調査者自身が事前に調査手法について検討すべきことだと思います。そしてまた、一人でも不快に感じる人がいるということを尊重してゆけないかとも思うのです。

博物館は博物館を利用する人たちが、安心して豊かな時間をする事ができる場であるということがとても大事ではないかと思います。それが、もしかしたら誰かに自分たちの会話を盗み聞きされているかもしれないという不安を来館者に与えていいものでしょうか。

あまり話を複雑にするつもりはないのですが、佐々木さんが対象としたのがアイヌ文化の展示であったことも大変気になります。民族学展示評価を専門とすると標榜するのであれば、なおのこと慎重になる必要があったと思います。民族（学）展示を対象とする博物館では微妙な問題を扱う場合もあります。まるで思想調査のように受け取られる懸念はないのだろうかとも思うのです。

会話採取調査方法の調査としての有効性についても、疑わしいものがあると思っていますが、この方法自体に賛成できませんので、ここでは検討しません。

私も展示をつくる者として、展示が一体どのように来館者に受けとめられているのかとても気になります。実際展示室に行って、会話を聞くこともあります。頼まれもしないのに説明を行うこともあります。しかしこれは程度の問題だと思います。展示をしたら、しっぱなしで、それ以降展示室に足を向かないということもあります。こうしたことを指摘しますと、では調査のガイドラインを作る必要はないかという話になるのかもしれません、博物館をよくしようと思っていれさえすればそれで十分ではないかと私は考えます。

また、博物館における調査自体を否定するものではありません。例えば、日本玩具博物館の報告書（「平成11年度文部省委嘱 親しむ博物館づくり事業 報告書」「平成11年度文部省委嘱 親しむ博物館づくり事業 伝承の草花遊びアンケート報告 1999年・夏季」）には、同館の理念と来館者に向こう姿をみることができ、このたび同館長が学会賞を受賞されたのも理由あることと、非常に参考になりました。

実は佐々木さんからは、その後、会話採取調査方法については問題があると思うようになったので、この方法についてはとりあえずストップするとの連絡を受けています。

例えば市民のとか、こどものとか言いながら、こっそり会話をきく。黙って展示室をつけてまわる。それは本当に市民やこどものことを考えていることになるとは思えませんし、博物館をはずかしめる行為ではないかとも思います。そして、もしかしたら調査という言葉が一方的すぎるくらいもあるのかもしれません。私たちはどうしても調査するほうの側です。目的と調査結果をどう使うかというほうに意識がいきがちですが、現在博物館で行われている多種多様な調査について改めて考えるべきことがあるように思うのです。

## 米国博物館協会(AAM)大会に参加して

株式会社三菱総合研究所  
松 永 久

### 1. はじめに

今年もAAMの季節がやってきた。私自身、昨年のクリーブランド（この詳細については、JMMA会報に井島真知さんが寄稿されているので、そちらを参照していただきたい。）に続き、今回で2度目の参加となるが、大会のアウトラインが全くわからないままに臨んだ前回に比べ、今回は想定される発表のイメージ等をいろいろ想像しながら、また発表者の所属にも留意しながら、自分にとって有益な発表をセレクトして聞くことができた。

今年の大会は5月14～18日の日程で、ボルチモア市で開催された。ボルチモア市は米国の首都ワシントンDCの北東65kmに位置する人口72万人（全米15位）の都市である。野球が好きな人であれば、ベース・ルースの生まれた町、あるいはカル・リプケン所属するオリオールズの町といえどわかるであろう。AAMの大会はボルチモア市の中でも人気スポットとして知られるボルチモア水族館にほど近い、ボルチモアコンベンションセンターで約600人が参加して熱心な討論が繰り広げられた。



会場の全景

### 2. 大会のテーマ

今年の大会のテーマは「Museums 2000 Reflection Vision Change（再考、展望、改革）」ということで、常に変化を続ける世界をよりよく理解するために、21世紀のミュージアムはどのようにして展示物の収集、保存、そしてそれにまつわる文化的な背景や自然界の解釈をしていくべきか、そしてどうすれば関わりを持つコミュニティ、によりよい対応ができる、変化に対して積極的に関わっていくだろうか、ということに力点が置かれていた。

そして、このテーマのもとで、次のような討議がなされた。

- ①運営、人材育成、プログラム、そして来館者獲得において、異なった人種、身体の不自由な人々を含めた団体の組織について
- ②ミュージアム間のパートナーシップ、非営利団体、企業と自治体間とミュージアムとのパートナーシップ
- ③長期間にわたり財政を潤すことができるような資金確保戦略
- ④来館者の注目をあつめ、彼らが展示物によりよく接する

ことができるような技術的プログラム

⑤スタッフや幹部、そして来館者の個々のニーズに対応できるミュージアムポリシー、運営スタイル、そして意思決定について

ここまででわかるように、アメリカのミュージアムの関心は人種的にマイノリティーな人々や障害者など、ミュージアムを訪れる全ての人々を対象とした包括的な取り組みを行うことに向けられており、その意味では既にアメリカだけの問題ではなく世界的な問題に立ち向かおうという姿勢が見て取れる。実際、今回の大会でも、海外からの参加者が数多くおり、演壇に立つ人も少なくなかった。

また、主催者は今回の大会のハイライトと特徴を次のように示していた。

- 1) 人種混在、キュレーション、資金確保、教育、運営と展示を含んだテーマに関する最新の技術や最も一般的になっているミュージアムフィールドの情報に関するセッションへの参加
- 2) 世界中の仲間たちとのネットワークづくりと意見交換
- 3) 世界最大規模であり、最新のミュージアム商品とサービスを紹介するミュージアムエキスポ2000への参加、オークション、ミュージアムシアターのパフォーマンス、本についてのディスカッショングループ、そしてミュージアムギフトショップのパビリオン
- 4) ミュージアムフィールドに影響を与え続けているAAMブックストアの本の著者のサイン会とディスカッション
- 5) ジョブプレースメントセンター（職業案内所）での情報公開とキャリアビルディングのための情報
- 6) ボルチモアエリアのミュージアム（美術館等）でのスペシャルナイトイベント

### 3. 今回の大会の特徴

私は今回で2回目の参加なので、昨年との比較しかできないが、今年のAAMの特徴を簡単にまとめると次のようになるだろう。

#### (1) セッション（報告）

セッションは、来館者リサーチと評価（evaluation）、展示、専門スタッフ養成、キュレーション、広報とマーケティング、運営、スマートミュージアム、セキュリティ、資金運営とメンバーシップ、技術とメディア、来館者サービス、教育、ボランティア、ボードメンバー等、ミュージアムの活動のほぼすべての領域に及んでおり、これらのはとんどはそのバックボーンとなる委員会からの参加で成り立っている。

今回のAAMで際だって目立ったのは、「IT（Information Technology）」関連のセッションが多いと言うことである。日本でも「IT」という言葉は、既に新聞やテレビなどで当たり前のように使われているので、ここで詳しく述べることは避けることにするが、昨年のAAMの大会と同時に開催されたMuseum Expoにおいてインターネットやバーチャルリアリティ等の事業者が多

数出席していた流れを受ける形で、早くも今年その成果について報告が始まっている。

『Get With I T : Training Museum Technology Specialist』と称してミュージアムのスタッフが近い将来に必要とされる I T 技術の習得を考えることを趣旨としたセッションで、ある報告者は、「20世紀は車を乗りこなすことが大切であったが、21世紀は I T を使いこなすことがそれと同じように大切である」という名言（！？）を吐いていたが、これからのミュージアムを考えていく上で、「I T」問題への対応は実に大切だと言うことを痛感させられた。

今回のAAMでは、「I T」関連のセッションは実際に21ものぼり、全体のセッションの数が160程であるから、既に1割以上に達している。この傾向は来年以降も続くものと見られることから、来年の大会に参加できれば、このあたりについてもう少し注目してみようと思った。

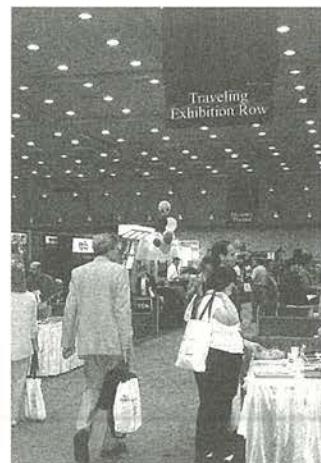
このほかで、私が特に関心を持ったのは、「evaluation（評価）」である。日本のミュージアムでは、一旦施設がオープンすると、その後の評価は「入館者数」という極めて定量的な指標だけが注目されてしまう。しかし、アメリカでは、展示やワークショップ、さらにはボランティアの活動など、様々な分野において必ずその成果をevaluateしている。（注：このあたりの詳しい事情については、シートル在住の三木美裕氏の報告（月刊ミュゼや丹青研究所の「季刊ミュージアム・データ」などを参照されたい。）そして、そのevaluationの結果を基に、より来館者にとって魅力的なミュージアムへ成長を遂げようとするのである。今回の大会の中でも、こうしたevaluationの方法論や実践報告が多数行われ、今後の日本におけるミュージアムの展開を考えていく上で、大いに参考になった。

## （2）Museum Expo 2000

今回のAAMの大会でも、「Museum Expo 2000」と称して、博物館に関連のある事業者の見本市が開催された。昨年と比べて会場が広いこともあり、約300社が出展した（写真参照）。AAMの大会と併設する形でこれだけ大規模にExpoが開催される背景には、AAMの参加者の多くがミュージアムの予算執行の決定権を持つ人であり、しかもこの時期は新年度の予算組みの時期と重なると言うことがある。

今回のMuseum Expo 2000では、ミュージアムのプランニング、ディスプレイ、展示物の輸送などを行う事業者の他、I T関連の需要を見込んで、グラフィックデザインやインターネットサービス、3-Dシステムといった事業者や全米のミュージアム、ミュージアム組織の出展もあり、会場は実に華やいだ雰囲気であった。中でも、今回のExpoで目を引いたのは、他館での特別展向けの貸し出しを意識して制作した作品が多数集まった「Tournig Exhibit」と呼ばれるコーナーである。その中の一つで、全米でも有数の展示面積を誇るインディアナポリス子ども博物館を例に取ると、「FLIGHT」をテーマに全米を巡回させている（1996年より）ということである。約750平方メートル（30メートル×25メートル）の展示

面積の中には、日本の空の旅の普及に多大な貢献を果たしたボーイング727のキャビンを再現したもの（アメリカでは今なお727は飛んでいる）や、1941年に作られた双発のプロペラ機ボーイングPT-17のほか、ヘリコプターのシミュレーター、コンピュータを使ったQ&Aコーナー等、どれも来場者が実際にふれて楽しむことができるものばかり並べられている。展示を希望するところには、3ヶ月で約1800万円（輸送費別）で貸し出しているそうで、既に2004年1月（シカゴ産業科学博物館）までスケジュールが入っているそうである。



「Tournig Exhibit」の様子

このほか、今回のExpoでは、AAMの活動（認証制度や評価制度といったサポート）に関するブースの他、アカペラシンガーによる練り歩きパフォーマンス、ドリンク・フードサービス、さらにはマッサージといった参加者を飽きさせないためのサービスもあり、実に充実した内容であった。

## 4. 終わりに

AAMの大会は、毎年会場を移動して開催されており、98年（ロサンゼルス）、99年（クリーブランド）、2000年（ボルチモア）の後、2001年（セントルイス：5月6～10日）、2002年（ダラス：5月12～16日）となっている。来年のセントルイスでは、『The Spirit of Community』をテーマに、今年とほぼ同じ規模での開催が予定されている。もし、アメリカのミュージアムの最前線に興味をお持ちであれば、こうした機会に参加することをおすすめしたい。

なお、もし、「2001年まで待てない！」という方がいらしたら、今年の11月5～7日にフィラデルフィア（ワシントンのニューヨークの間にある都市、ボルチモアに至近）で、『Musee Expo』が開催されるので、そちらに参加するのも一つの手であろう。こちらは学芸員や教育普及担当者を主たる対象としたコンベンションで、パソコンを使ったラボやレクチャーなどもあり、AAMの大会とは趣が少々異なっている。詳細については、[www.MuseeExpo.org](http://www.MuseeExpo.org)を参照されたい。

（協力：奈良章代（在ニューヨーク））

## 「芸術は、爆発だ！」

芸術異端児の震源地～岡本太郎記念館～  
JMMA事務局  
森 花 枝

### 「芸術は、爆発だ！」

溢れんばかりのエネルギーが漲る作品を生み出しつづけた岡本太郎のこの言葉を肉声で聞くことができなくなつてから、もうどのくらいが経つたであろうか。過去の人として意識させない、いや思わない彼のすべてを感じさせてくれる場所が、東京都青山の閑静な住宅街の中にある。芸術のみならず、人間の常識すべてに戦いを挑んだ異端児太郎の出生の場所だ。



### 芸術への扉が開かれる

岡本太郎亡き後、彼が幼少時代を過ごした場は記念館として生まれ変わった。館長は、彼が芸術活動を展開していた真っ最中に秘書として、また養女として生活を共にした岡本敏子氏。

「生き続ける人、岡本太郎」これは、この館に入るや否や第一に感ぜずにはいられない一大テーマである。一見、太郎の作品は無造作に置かれ、作品の持つエネルギーに圧倒され、落ち着かない気さえする。しかし…作品を通して、彼の爆発的なエネルギー・想像力・そして生命力は、違和感なく来館者の中に浸透する。

「岡本太郎のすべてを感じ取ってほしい」という館側の意志と、「岡本太郎の源を感じ取りたい」という来館者の願望とが心地良いほどバランスが取れていると思うのは、実は、館長の岡本敏子氏独自の感性による博物館運営のコンセプトによるものなのだ。

まず、記念館の建物の中に入ると、靴を脱ぐ。（まさに、太郎の家に遊びに来て、「お邪魔しま～す」という感じではないか！）靴を脱ぐ行為によって、来館者の心は一気に開放される。くつろぐという情緒的な、人間的なムードに一新させる。この時点では来館者の誰もが気付いていないが、もうすでに岡本マジックにかかっているのだ。



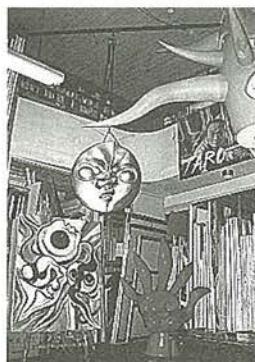
シンプルかつ高く広い空間が、太郎の世界にくつと引き込む。

机をどかそうとしてできたであろう床の傷、力強く

こすり付けたために割れてしまった、色がついたままの筆、そして膨大な数の未完の作品…どれもアリティーがある。近くで見られるという形式をとつたからこそ味わえる生々しさがそこにある。（そしてそこには、岡本太郎と等身大の人形がお出迎えしてくれる。気付かないで、ドキッとするが…）



サロンには、岡本太郎と等身大の人形が皆さんをお出迎え。



アトリエは、岡本太郎が制作していた時ままで公開。床には、作品と格闘した時の痕跡などがあり、かなりリアル。

2階に上がると、企画展示の場となる。玄関からの吹き抜けとなっていて、そんなに広いとはいえないが、息苦しくない。

館内の写真撮影は、咎められない。作者と鑑賞者の間が可能な限り近づくことが許される。



2階展示室風景 展示構成もどこか雰囲気がある。

企画展の構成、展示作品の配置、作品解説、ワークショップなどもすべて岡本敏子館長が手がける。岡本太郎の作品のほとんどは、川崎市に寄贈され、現在は「川

崎市岡本太郎美術館」に収められているので、ここ「岡本太郎記念館」では、それ以外の作品、つまり、太郎が最後まで手放さなかった作品・未完の作品・岡本敏子館長が気に入っている作品が収蔵されている。太郎のことを誰よりも知っている敏子館長の手によって、生の息吹きを感じさせながら来館者に共感の架け橋を渡してもらいたい、私は今まで感じたことのない芸術家と鑑賞する側との親密な距離感を与えてもらっているということを実感せずにはいられなかった。

この館を開館するにあたり、構想の段階から岡本敏子館長と携わってきた関係者の方の話によれば、「太郎の作品に共感し、楽しんでもらうこと」こそ館側の意とすることだという。「生き続ける人、岡本太郎」をコンセプトに、彼を誰よりも知っている敏子館長の作品に対する思想が反映しているのだと。それに、関係者の方は、敏子館長のことを「岡本太郎の伝道師」と呼んだ。このような、美術館では一種無謀とも思えるやり方も、来館者と伝道師との両方の望むところを理解したこと。この斬新なやり方が、今までほんどの人が越えるのが難しかった美術への扉を開くきっかけにもなっていると。

「岡本太郎の作品がどのように展示されれば一番生きてくるのか、その術を誰よりも知っている。作者の作品への思いが理解されていないと、作品はただのモノと化す。だが事実、この記念館に来ると、作品一つひとつを感じずにはいられない。岡本太郎が生き続ける人として、みんなの心の中にいてほしいという敏子さんの願いが、努力が感じられる、そんな場所ですね。」とおっしゃっていた。

## 今、若者にブームなワケ

岡本敏子館長が生み出す空間は、作品と来館者相互間だけのものではない。記念館全体を見ても、そこはとても居心地が良い「ゆとり」を感じさせる。

読者の皆さんには、ある美術館なり博物館なりに出かけてふと一息、作品を見た後の余韻に浸りながらコーヒーでも飲もうかとした時、ガッカリしたことはないだろうか。

(コーヒーと言わずお茶でも結構) 私は個人的に、芸術鑑賞をしたあとはいろいろと思いを巡らす時間がほしいタイプだ。「ゆとり」がほしい。しかし、美術館なり博物館なりに併設されているカフェでその時間を過ごすことは、ほとんどなかった。落ち着けないだけでなく、コーヒーがおいしくないのである。

だが、この記念館はその伝説を壊した。併設のカフェは、「a Piece of Cake」と言って、現在様々な場で活躍している大川雅子さんというフードコーディネーターがプロデュースしている。ケーキは、500円からあり、味は素朴だが手作りな感じがしつこくなく、ホッとさせる。コーヒーや紅茶も何種類も用意され、充実している。岡本太郎の庭にあるうるさいほど飾られたオブジェも、そんな風には感じさせず、カフェの

窓から見た風景は、まるで庭全体がアートと思わせる。カフェブームが加熱する若者の間でも、ここはいつも話題である。街の雑踏を眺めてのカフェもいいが、閑静かな住宅街の中で、爆発する太郎の作品を眺め、余韻に浸る…そんな雰囲気を味わうために、わざわざやってくるお客様もいるそうだ。



カフェから見た庭

また、カフェだけでなく、ミュージアムグッズも充実している。中でも人気商品は、太郎の作品をモチーフにしたピンバッジである。私は、記念館に取材に行き、カフェで雰囲気に浸っていた時、ヒョッコリ現れた岡本敏子館長をお目にかかることができた。(直接お話を聞くことはできなかつたのだが…) 彼女の襟元は、太郎のピンバッジでいっぱいだった！

「ミュージアムのコーヒーはまずい」という伝説を打ち破り、新しい感覚を取り入れた岡本敏子氏の感性には、脱帽であり、また憧れの念さえ私たちに植え付ける。



## リンクするシステム

岡本太郎記念館を設立するにあたり携わった方の話によれば、岡本太郎記念館と川崎にある岡本太郎美術館は、共にリンクすべきだと言っていた。美術館にある太郎の完成作品を見て、記念館を訪れた時、「そうか、あの作品はここで制作されたのか！」と実感できる場になってほしい。その逆もしりりである。意識の中でつながる、互いにそういう場であってほしいと。そういうつながりを持ってこそ、館長の望む「岡本太郎がみんなの中に生き続けてほしい」ということにもつながってくるのではないだろうか。



専門知識をお持ちの方が多い中で、素人感覚で次々と書いてしまったことをお許しいただきたい。だが、たまには仕事を休み、この記念館で普段味わえない感覚を覚えることで、新たな感性が磨かれるなら、ぜひ足をお運びいただきたいそんな場所である。



## ～岡本太郎記念館～

### 開館時間

10:00～18:00 (入館は 17:30 まで)



### 休館日

火曜日 (祝日の場合は翌日)

\* 定休日の場合でも、団体で観覧を希望の際は事務所までご連絡下さい。

年末年始 (12/28～1/4) 及び保守点検日



### 観覧料

一般 ¥600 (¥500)

児童／生徒 ¥300 (¥200)

※ ( ) 内は 15 人以上の団体料金



### 交通案内

宮団地下鉄【銀座線】・【千代田線】・【半蔵門線】

『表参道駅』より徒歩 8 分

都営バス (渋 88 甲系統)

【東京駅南口行】・【東京タワー行】・【渋谷駅行】

『南青山 6 丁目』下車徒歩 2 分



### 連絡先

〒107-0062 東京都港区青山 6-1-19

財団法人 岡本太郎記念現代芸術振興財団

TEL03-3406-0801/FAX03-3409-5404

### 今後の企画展の予定

『不思議な世界』展

平成 12 年 7 月 5 日～平成 12 年 10 月 2 日

『顔・』展

平成 12 年 10 月 4 日～平成 12 年 12 月 27 日

『顔・』展

平成 13 年 1 月 5 日～平成 13 年 4 月 2 日

◆約 3 ヶ月で展示がえをしている。1 ヶ月ごとにちを決めて、館長によるギャラリートークが行われる。

こちらにも是非お出かけください

## ～川崎市岡本太郎美術館～

### 開館時間

9:00～17:00 (入館は 16:30 まで)

### 休館日

月曜 (祝日は除く)、祝日の翌日、年末年始

### 料金

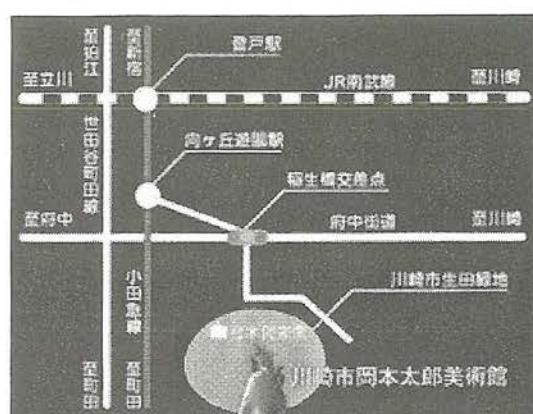
常設展・一般 500 円、小中高大学生 100 円  
企画展・展覧会によって異なります。

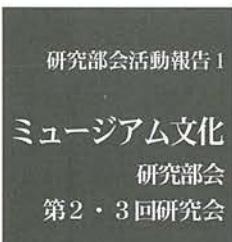
### 交通

小田急線向ヶ丘遊園駅下車徒歩 17 分

### 連絡先

〒214-0032 川崎市多摩区枡形 7-1-5 TEL044-900-9898/ FAX044-900-9966





## テーマ：「しまの文化とミュージアム」

期 日：平成11年11月10日（土）、11日（日）

ホスト：大三島町：渡辺 洋（町教委課長）

浅野 執持（大三島美術館学芸員、JMMA会員）

瀬戸田町：和気成祥（前町長）

耕三寺孝三（耕三寺博物館副館長）

### ・地域の特徴・

本州・四国を結ぶ3番目の連絡橋（平成11年5月開通）ルート「しまなみ海道」は、尾道市と今治市の間に連なる島々を10の橋で結んでいる。他の2つの本四架橋ルートに比べ、生活道としての役割が大きく、開通による地域の生活スタイルや島の文化への影響が予想される。自転車通行や歩行が可能であるのが特徴。開通後、ハイカーやサイクリングによるツーリストが予想を大きく上回っており、観光道としても、他のルートとは異なった特徴を發揮している。

大三島（愛媛県）、生口島（広島県）は、瀬戸内海の小島のイメージは薄く、観光施設、文化施設が集中する地域である。両島とも、大山祇神社、耕三寺という歴史的な観光拠点を有し、その周辺に多くの公立文化施設が配置されているという共通点がある。

これらのミュージアム構成群は、地域住民より島外からのビジターを意識しており、また、地元への文化的貢献より地域への経済効果を目指している。近年、参拝者数が低迷していたものの、潜在的集客能力を有していたことから、架橋開通後、観光客数が急増している。ミュージアムの在り方も変化している。

### ・歴史を現代に活かす＝大三島町・

大三島には、大三島町と上浦町がある。大三島町は人口4600人。

町のこれまでの観光拠点である大山祇神社は、天然記念物の楠の叢林に囲まれ、国宝・重文の武具・甲冑の8割を収蔵する。宝物館及び海事博物館に多くの陳列があるが、展示・観覧ルートにアクセントをつけて、実物の迫力を伝えてほしい。架橋開通にあわせて、町立の物産館『しまなみの駅 御島』がオープンした。「道の駅」に指定されたこの物産館には、町の観光課があり、町の観光、産業、文化などの広報拠点になっている。

大山祇神社に隣接する大三島美術館は、田淵俊夫、中島千波らの現代日本画を中心とする収蔵作品をもつ。年4回程度の展示替えをしているが、住民の文化活動の拠点としつつ、島外からのビザターを引きつける企画が求められる。特に、様々な活動へのボランティアの活用、

「ここにしかない」地域性の発揮が地方ミュージアムとして課題であろう。大山祇神社や上浦町の村上三島記念館、田々羅しまなみ公園との連携や町内施設『わくわくパーク』、『憩いの家』等の活性化など発展の可能性は

大きい。未利用資源（自然、人、もの等）の発掘・活用を期待する。

### ・文化によるまちづくり＝瀬戸田町・

生口島、高根島からなる瀬戸田町は人口1万人。耕三寺を最大の観光拠点としていたが、『文化芸術のまち瀬戸田』を目標に新たに「文化によるまちづくり」を展開している。

国内屈指の音響を誇る『ペルカントホール』と手始めに、『島ごと美術館』の構想を興し、著名作家による野外彫刻の配置（現在17ヵ所）、柑橘類の体験ゾーン『シトラスパーク』、海浜スポーツ公園『サンセットビーチ』を整備した。その集大成とも言える『平山郁夫美術館』が一昨年（平成10年）開館し、町のイメージを高揚した。美術館は、月平均10万人の入館者があり、ミュージアムショップの売り上げも数千万に上る。流通面を中心に交通、農・水産業に至る経済効果は大きく、文化を地域振興に結び付けた。

今後の課題として、耕三寺や平山郁夫美術館周辺に集中した人の流れの広域化が指摘されている。そのためには、架橋開通に伴う車中心の通過型（見聞中心）ツーリングとともに、周辺の島々との連携を図りつつ、船（海路））を活用した滞在型（創造併用）リゾートを重視することが必要であろう。

瀬戸田の問題点は、島のミュージアム化に「住民の顔」が見えないことである。ミュージアムに住民が参加し、文化を継承・創造すること、そして、地域の生活、伝統、文化をミュージアムに生かし発信することが必要である。

### ・しまのミュージアムへの提言・

今回は、島、そして、観光地という経済・文化環境にあるミュージアムの役割、機能とその可能性、課題等について研究した。流入人口を見込んだミュージアムの運営は、観光地に限らず多くの地域での共通的な課題である。瀬戸田は、経済効果面で「文化によるまちづくり」を達成しつつある好例である。

町全体が「ミュージアム」としていかに共鳴していくか、「ミュージアム」を島外にいかに広めていくか、その中心として、例えば大三島美術館や平山郁夫美術館がいかに機能していくか。当然、両館の機能は異なるもの

になるはずであり、両館を含む地域資源の連携による補完作用と相乗効果は極めて大きい。瀬戸に広がる「ミュージアム・アイランド」の実現を期待したい。  
 (幹事：浅野執持／部会長：沖吉和祐)



## 「平成 12 年度各研究部会活動計画」

### ◆ミュージアム文化研究部会

#### 活動テーマ : ミュージアムのまちづくりとエバリュエーション

本年度は、学会の共通テーマ「リレーションシップ」を基本に据えつつ、ミュージアムを核とするまちづくり、あるいは、地域全体のミュージアム化をすすめる『ミュージアムのまちづくり』を中心課題として、研究を展開する。

そのなかで、ミュージアムのアイデンティティの確立、エバリュエーションの必要性（在り方）について研究を重ね、具体的な提案を目指す。

また、『まち』において重要な位置を占める大学に着目し、ユニバーシティ・ミュージアムの役割について検討する。

研究会は、4回程度開催の予定。

秋に、現地研究会を開催。（支部との共同開催を計画）

なお、適宜、他の研究部会との合同研究会を企画する。

### ◆制度問題研究部会

#### 活動テーマ : 博物館法の解釈をめぐる諸問題の検討

諸制度の規制緩和が叫ばれている昨今だが、博物館を取り巻く環境を見ると、博物館の設置にあたり、博物館法の望ましき基準などがそれぞれ当事者間において都合の良い解釈ですすめられ、博物館法の趣旨が曖昧となっているよう見える。そのため当部会においては前年度に引き続き各館の博物館法の解釈の実状を調査分析し、博物館法をめぐる現時点の問題点の検討を行い、諸制度の確率に向け議論を深めてゆきたい。

研究会の開催は年3回程度（6月、9月及び11月頃）を予定している。

6月：市立博物館の登録の実際

話題提供者：八千代市立郷土博物館主査 八木康行氏

## ◆理論構築研究部会

本研究部会は博物館の実践的な研究を行う他の部会の成果を生かしつつ、博物館運営論の理論的な構築を目指すものであり、これまで「博物館研究の現状」「博物館の展示事業にかかる問題」「博物館資料としての文献史料」「連携」等のテーマについての研究会を実施してきました。特に平成11年度は、学会全体として「リレーション・シップ」をテーマとして、部会毎にテーマを設けて研究会を行いました。平成12年度も学会全体としては「リレーション・シップ」を再度共通テーマとして設定しており、本研究部会においては「博物館の各機能にわたるマネージメント」を本年度も継続してテーマとした活動を行うことによってミュージアム・マネージメントの今後を考えようとするものです。

研究会の開催は年4回程度を予定

- 7月：テーマ「ファウンド・レイジング」（場所・発表者未定）
- 10月：テーマ「コレクション・マネージメント」（場所・発表者未定）
- 12月：テーマ「博物館利用者についての調査」（場所・発表者未定）
- 1月：テーマ「博物館研究のあり方」（場所・発表者未定）

## ◆事業戦略部会

活動テーマ：ミュージアムの経営と評価

公共的性格の強いミュージアムは、市場経済の枠の外に位置づけられ、論じられることが多かった。そのため、運営という視点はあっても、「経営」という視点からのアプローチ、研究が少なく、ミュージアムが好むと好まざるに関わらず市場経済にさらされる現状にあっては、この経営問題は、今後の重要な課題である。一方、ミュージアムの経営には、市場経済を超えた公共サービスという一面があり、この側面での「評価」の在り方が今後のミュージアムを活性化させるために検討、研究される必要がある。

第1回研究会（文化環境研究所と共催）

日 時：平成12年5月25日

テーマ：ユニバーサルミュージアムの現状と展望

　　ミュージアムの経営と評価

会 場：大阪国際会議場

講 師：奥野 花代子氏（神奈川県立生命の星・地球博物館専門学芸員）／山本 哲也氏（國學院大學文学部助手）／井上 重義氏（日本玩具博物館館長）／佐々木 亨氏（北海道大学教授）

第2回研究会（九州支部と共催）

日 時：平成12年6月中旬

テーマ：九州国立博物館の展示・教育普及活動

　～21世紀初頭にオープンを目指す国立博物館のリレーションシップを中心に～

会 場：検討中

講 師：高倉 洋彰氏（西南学院大学教授）

第3回研究会

日 時：平成12年9月中旬

テーマ：ミュージアムと経営手腕

会 場：東京都写真美術館（予定）

講 師：徳間 康快氏（東京都写真美術館館長／徳間書店社長）（予定）

**第4回研究会**

日 時：平成12年12月初旬  
 テーマ：PFIとミュージアム経営  
 会 場：江ノ島水族館（予定）  
 講 師：堀 由紀子氏（江ノ島水族館館長）（予定）

**第5回研究会**

日 時：平成13年2月初旬  
 テーマ：NPOとミュージアム経営（予定）  
 会 場：検討中  
 講 師：検討中

**◆ミュージアムショップ研究部会**

**活動テーマ**： 多様なミュージアムショップの実状を探り、それぞれの個性が發揮できる  
 ミュージアムショップのあり方を考える

1. 前年度に引き続きミュージアムショップへのアンケートを行う
2. 前年度の結果報告をまとめる
3. 事例研究としてミュージアムショップの見学を行う
4. 前年度好評だったミュージアムショップの経営について専門家（経営コンサルタント等）との話し合いの場をもつ

**◆教育・コミュニケーション研究部会**

**活動テーマ**： 博物館における教育コミュニケーションの現在的課題

次のテーマについて講師を選定の上、4～5回研究会を行う。

- ・総合学習の展開と博物館のあり方
- ・博物館の教育活動とボランティア
- ・地域コミュニケーションにおける博物館の役割
- ・生涯学習に対する博物館の活動
- ・アメリカのISE（インフォーマル・サイエンス・エデュケーション）プログラムにおけるミュージアムの役割

6月：総合的学習の展開と博物館の在り方

講師：筑波大学教育学系 大高 泉教授

**◆ソフトサービス研究部会**

詳細は未定です。

## 新刊紹介

### ハンズ・オンと これからの博物館

インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営

ティム・コールトン著

染川 香澄 芦谷 美奈子 井島 真知 竹内 有理  
徳永 喜昭訳

東海大学出版会 (本体 3,200 円 + 税)



### ハンズ・オンと これからの博物館

インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営

ティム・コールトン著  
染川 香澄 芦谷 美奈子 井島 真知 竹内 有理 徳永 喜昭訳

東海大学出版会

今まで、博物館の展示づくりやプログラム開発に関わってきて、疑問に思うことがあった。それは、「参加型展示」と「ハンズ・オン展示」といわれる展示は、果たして、本当はどんなものなのか、ということである。15年ほど前から、いわゆる、「参加型展示」という言葉がもたらされ、これぞ参加体験型!と謳われて登場する展示をいくつか見てきた。しかし、その多くは、単に操作に身体的な経験を組み込んで、たとえば、グルグルとレバーを回すと動作が始まるものだつたり、アメリカの子どもの博物館や科学館の展示をそのまま輸入しただけのものだつた。その過程で、「ハンズ・オン展示」も、言葉として輸入され、最近では、「参加型展示」にかわり、やはり、もてはやされている。しかし、その本質や考え方を伝えてくれる書物や知識にはなかなか出会うことがなかつた。歯がゆかつたおそらく、多くの方々も同様の感触をもつてゐるのでなかろうか。

本書は、こうした疑問に、ひとつずつ答えを提示してくれる。

第一章中の「ハンズ・オンとは?」という見出しの節では、「ハンズ・オン」と「インタラクティブ」を同義として用いる前提を解説し、その中で、次のように説明する。「博物館のハンズ・オン系展示装置あるいはインタラクティブな展示装置には明確な教育目標がある。その目標とは、個人もしくはグループで学習する人々が、事物の本質あるいは現象の本質を理解するために、個々の選択にもとづいて自ら探求してみようとする利用行動をたすけることにある」。また、ハンズ・オンの行き着く先には、「人々が試し、考えることで、心を動かされる、マインズ・オンがある」と暗黙に了解されている、としている。

この基本的な位置づけにのつとり、以下、教育的側面、展示開発、財政、マーケティング、現場の運営、組織・人材管理、教育プログラムと特別イベントの運営、これらからのハンズ・オン展示という章立てによつて、幅広い視点で展開し、分かりやすく説明してくれている。

もともと、ハンズ・オン展示は、アメリカの子ども

いまで、博物館の展示づくりやプログラム開発に関わってきて、疑問に思うことがあった。それは、「参加型展示」と「ハンズ・オン展示」といわれる展示は、果たして、本当はどんなものなのか、ということである。15年ほど前から、いわゆる、「参加型展示」という言葉がもたらされ、これぞ参加体験型!と謳われて登場する展示をいくつか見てきた。しかし、その多くは、単に操作に身体的な経験を組み込んで、たとえば、グルグルとレバーを回すと動作が始まるものだつたり、アメリカの子どもの博物館や科学館の展示をそのまま輸入しただけのものだつた。その過程で、「ハンズ・オン展示」も、言葉として輸入され、最近では、「参加型展示」にかわり、やはり、もてはやされている。

さらに、私たちが留意し、意識に向けておくべきことや、教えられることも多くある。

たとえば、欧米の学習理論にのつとつて解説される教育的側面や、利用者をパートナーに進める展示開発と展示評価などは、その最たるものであろう。

これまでの日本の博物館の展示づくりやプログラム開発には、これらの観点が、無かつたか、きわめて希薄であったと思ふ。豊かな博物館体験を保証するには、展示は、たんなるアミューズメント装置ではなく、たしかな学びの理論に裏打ちされたものであるべきだし、それをよりよく開発するためには、使い手となる利用者との共同作業である評価と検証が不可欠なのである。

ともすれば、財政やマーケティングなどの章に心を奪われるかもしれない。だが、日本の博物館に欠けていたと思われる、学びの場としての博物館、展示開発における利用者とのパートナーシップ(展示評価)の大切さを、本書から読み取る必要があると感じる。そのことで、日本のわたしたちが漠然とつかんでいた、博物館の本質を再認識させてくれるし、わが国のことから博物館を考えていいくきっかけをも与えてくれる。

原題は、Hands-On Exhibitions。(ハンズ・オン展示)であるがそれを「ハンズ・オン」とこれからの博物館」としたことは、この意味から、的を得たものであるのだ。訳出のご苦労もしのばれ、若手博物館研究者と学芸員からなる翻訳チームの皆さんには、大きな拍手をおねぎりしたい。(了)

評者

重盛恭一  
株式会社トータルメディア開発研究所

## インフォメーション

## INFORMATION

## 研究紀要第4号発行に関するお詫び

先日も書面でお知らせ致しましたとおり、例年3月に発行してまいりました研究紀要が、この度、印刷会社の印刷ミスが発覚し、手直しをしていたために一部の会員の皆様に発送が遅れてしまいました。ご迷惑をおかけ致しましたこと、深くお詫び申し上げます。

今後はこのようなことがないよう十分注意し、さらなる機関紙等の充実をはかる所存であります。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 会報に掲載する投稿原稿を募集いたします

JMMA会報では、投稿原稿を募集しています。編集方針は以下の通りですので、原稿を投稿する方は事務局までお知らせください。

## 〈JMMA会報投稿原稿の考え方〉

1. 原則として会員の未発表原稿を取り上げるものとしますが、事務局から会員及び会員以外の方に原稿を依頼することもあります。
2. 投稿にあたっては、会報のどのコーナーに投稿するかを明記し、事務連絡表等で事務局まで申請してください。
3. 原稿は、署名原稿として掲載します。
4. 投稿された原稿については、編集委員会によって審査が行われ採否を決定します。また、修正等をお願いする場合もあります。
5. 投稿原稿採否にかかわらず、返却いたしません。

## 会報18号（次号）情報提供のお願い

会員の方々が携わった、または見学した展示施設情報、リニューアル情報、ミュージアム新設情報、展示メディアの開発等をお知らせください。会員の方々の出された出版物や研究成果をお知らせください。会報等で掲載します。サポートしてほしい情報や案内等も、お気軽にお寄せください。

## 〈JMMA会報の基本構成〉

1. 提言・論文・実践報告  
会員の研究、考察、実践活動等の成果を発表します。
2. 研究部会報告  
各研究部会の活動報告を掲載します。
3. ミュージアムのエントロブルナ（今号は貞の都合上、割愛させていただきました）  
ミュージアム運営において、果敢な取り組みを行っているミュージアム人にスポットライトをあて紹介します。

#### 4. 時の話題

ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連の新制度、その他さまざまな取り組み成果など、ミュージアム・マネージメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

#### 5. 新刊紹介

ミュージアムに関する本、ミュージアムマネージメントに参考になる本等を、書評を添えて紹介します。

#### 6. 支部会だより（今号は貢の都合上、割愛させていただきました）

各支部会の活動報告を掲載します。

#### 7. インフォメーション

事務局からのお知らせを掲載します。

### 会員名簿の発行月を変更しました

例年、会員名簿を3月の大会時に会員の皆様にお配りできるよう発行してまいりましたが、今年度より6月の発行と致しました。毎年4月になりますと、会員の皆様から人事異動等でご所属、住所変更等のお知らせが多いため、誠に勝手ながら発行月を変更致しましたこと、ご了承下さい。

### 広告投稿について

新設館、企業、新製品・新技術の広報、ミュージアムスタッフやボランティアの募集など、会報への広告出稿をご希望される方は事務局までご連絡ください。原則として、民間企業や団体は有料とさせて頂きます。公共団体その他については隨時ご相談ください。

### 事務局から

事務局の窓口業務は、月曜日から金曜日の午前10時から午後5時までとさせていただいております。ご了承ください。なお、ファックスについては常時受信可能ですので、こちらもご利用ください。

### 国際シンポジウムのご報告

去る5月27日（土）28日（日）に大阪国際会議場で開催いたしました「国際シンポジウム～新ミュージアムの時代」は、お蔭様で、充実したシンポジウムにすることができました。多くの会員の皆様のご参加とともに、会員外の方々にも多数ご参加をいただき、盛況のうちの幕をとじることができました。誠にありがとうございます。

詳しいご報告はJ MMA会報18号（次号）に掲載する予定です。どうぞご期待ください。また、NHKの衛星放送にて、来る8月5日（土）午後1時から、国際シンポジウムの模様を放送する予定です。こちらのほうも是非ご覧下さい。

なお、当日は不手際な点が多く、ご迷惑をおかけしましたことをこの場をお借りしてお詫び申し上げます。